様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４３４３

研究課題名（和文）幼児・児童の感情言及と関係調整プロセス：他者理解への道筋を探る

研究課題名（英文）Emotional utterances and the regulation of social relationships in early and middle childhood: Developmental processes in relation to social understanding

研究代表者
岩田　美保（Iwata, Miho）

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：００３３４１６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、幼児・児童期の他者理解について、社会的文脈での彼らの自他感情言及と関係調整のプロセスをふまえ発達的な検討を行った。具体的には (1)幼児間の仲間遊びでの感情言及の様相及びその関係調整機能、 (2)幼児の仲間遊びでの感情言及文脈の発達過程、(3)児童間の話し合いやそこでの感情調整を支えうる教師の介入内容に着目し検討した。総じて、幼児の(特にポジティブな）感情言及が、幼児期を通じ、その関係構築に寄与している可能性及び、幼児期の多様な仲間遊び文脈や、教師のサポート的な介入を含む児童期の自主的な話し合いの場が、彼らの感情コンピテンスを促す場として重要な役割を果たしている可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果は、社会的場面での幼児の感情言及の様相やそれがもつ対人機能、また、幼児期を通じた感情言及に関わるプロセス（仲間遊びでの感情言及文脈）を明らかにしうるものであり、他者理解（特に心の理論の個人差）や、感情コンピテンスの発達に関わる社会的相互作用についての一資料を提供するものとして大きな意義がある。また、児童期の自主的な話し合いでの教師の介入を含むやりとりに関わる基礎分析の成果は、関係調整的コミュニケーションの発達過程の解明につながり得るものであり、今後、児童期の社会的関係の中での感情言及と関係調整の実態を明らかにしていく上で重要と考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the developmental processes of social understanding during early and middle childhood, by focusing on emotional utterances and the regulation of social relationships. We gathered naturally occurring emotional utterances in the context of peer play, class discussion, and family conversation from unstructured observations. We especially focused on (1) preschool children’s emotional utterances in relation to the regulation of social relationships; (2) the context of preschool children’s emotional utterances in peer play; and (3) elementary school children’s verbal communication and interpersonal emotion regulation in classroom discussions by teacher’s support. The results suggested that positive emotional utterances contribute to preschool children’s relationships in the course of early childhood and the significance of the contexts of diverse peer play and class discussion in social and emotional understanding.

研究分野：発達心理学

キーワード：他者理解　感情コンピテンス　感情言及　社会的相互作用　仲間遊び　関係調整　対人機能　感情語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

これまで、子どもの他者理解の発達は、主に実験的な検討(J.Piaget；H.Wimmer＆J.Perner；子安,等)を通じて、幼児期から学童期中期にかけて深まることが指摘されてきた。一方、身近な他者との日常的なやりとりでは、子どもが2歳ごろから自他の感情に言及し始めることや、それらを含む自他の内的状態への言及に関わるやりとりが、子どもの他者理解に大きな役割を果たしている可能性が示されてきた(Bretherton & Beeghly,1982;Dunn,Brown,& Beardsall,1991 等)。その後も、感情に関わる会話や言語発達が他者理解の発達に重要な意味をもつことが指摘されるところであるが(Astington,1999,2005；Dunn & Brophy,2005;内藤,2007)、幼児期から学童期の感情言及を含む日常的な社会的やりとりに基づく他者理解の実証的な研究は、未だ少ないのが現状である。

一方、感情発達の研究領域においても、そうしたやりとりは、感情コンピテンスの獲得を促し得るものとして、その意義が改めて強調されている(Dunn,2008;Buckley & Saarni,2009 久保,2016)。特に、ポジティブな感情は、対人関係の拡張や発展を促すとされる（Fredrickson、2001;Seligman,2002)。他方で、ネガティブな感情への言及を伴うやりとりは葛藤の見直しや解決に重要な意味をもつことが指摘されている(Lagatutta＆Wellman,2002;Dunn,2008)。しかし、子どもが身近な他者とのやりとりでそれらの感情言及を伴いどのような関係調整を行っているかについての検討は少なく、基礎データも含めてその蓄積と報告が待たれるところである。園や学校、家庭での子どものそうした感情言及に伴うやりとりをふまえながら、実証的検討を行うことは幼児期から児童期中期にかけての他者理解の発達過程を捉えていく上で極めて重要といえる。

２．研究の目的

本研究の大きな目的は『幼児・児童期の他者理解』について、日常的な社会的場面での彼らの自他感情言及とそれに伴う関係調整のプロセスをふまえて発達的な検討を行うことである。具体的には、①幼稚園児の仲間遊び場面での、自他のポジティブ・ネガティブ感情への言及を伴う関係調整やそのプロセスについて検討する。②小学校の「特別活動」授業時の低～高学年の児童間の話し合い場面での、ポジティブ・ネガティブ感情言及を伴う意見表明やそこでの関係調整プロセスについて検討する。③幼児・児童の三世代を含む家族間の食事場面の会話におけるポジティブ・ネガティブな感情言及を伴う関係調整プロセスについて検討する。

これらの観察結果及びこれまでの筆者の研究を総合し、幼児・児童期の社会的文脈における他者理解の発達プロセスに関する仮説を提出する。

３．研究の方法

(1)園での仲間間の感情言及に関わるやりとりの検討

首都圏の幼稚園において、継続的に観察を行った。概ね1か月に2回の割合で、朝の自由遊び時間（約2時間）の室内及び屋外（一部の遊具）での3～5歳児の仲間同士(2名以上)のやりとりについて参与観察を行った。観察方法は、筆記記録を中心とし、毎回フィールドノートを作成した。また、補助的に音声記録（ボイスレコーダー使用）を併用した。これらの観察記録に基づき、幼児間のやりとりについてプロトコルデータを作成し、仲間遊びにおける感情言及に関わるやりとりの内容について検討を行った。

(2)小学校での児童間の感情言及に関わるやりとりの検討

首都圏の小学校において、特別活動での児童間の話し合い場面の観察を行った。観察については、筆記及び、映像や音声記録を用い、毎回フィールドノートを作成した。それをもとに、プロトコルデータを作成した。また、すでに得られているデータに関し、話し合いでの児童同士のやりとりについて、感情的側面への気づきを促す教師の介入の観点もふまえながら、基礎分析を行った。

(3)三世代の家族間の感情言及に関わるやりとりの検討

三世代家族の観察データ（非参与観察、撮影は家族に依頼、観察は、家族の都合を最優先とし、観察回数やインターバルに関し、無理のない範囲で行う）のプロトコル化と、同やりとりの特徴等に関わる基礎分析を進めた。

４．研究成果

(1)幼児期の感情言及と関係調整プロセスについての検討

本研究期間においては、幼児期のポジティブ・ネガティブな感情言及と関係調整プロセスについて、以下の検討を進めた。

①幼児期のポジティブ感情言及と関係調整プロセスについての検討

幼児期のポジティブ感情言及と関係調整プロセスについては、親密な仲間間にみられるポジティブ感情言及（「おもしろい」・「楽しい」への言及）が、彼らの関係構築にどのような役割を果たしているかに着目して縦断的検討を行った。2コホートの3～5歳クラス期の3年間の仲間遊びの縦断的なやりとりをもとに、同言及の機能と原因を調べた。そのうち4、5歳クラス期に

ついては、各コホートの特定の仲良しグループ（A グループ・B グループ）に焦点をあて、同言及の機能及びそれが関係構築に果たす役割について質的に分析した。
その結果、「おもしろい」・「楽しい」への言及の機能はコホート間に共通し、1 期（3 歳 12～3 月）では興味や関心の共有を目の前の仲間に求める機能、2 期（4 歳 4～7 月）ではそれを第三者に求める機能、3 期（4 歳 10～3 月）には自他のそれらの一致度をメタ的に捉える機能、4 期（5 歳 4～6 月）では過去の感情経験の共有に関わる機能、5 期（5 歳 11～3 月）ではそうした過去の感情経験の共有及び未来や期待の実現化に関わる機能がみられた。また、それらの言及が、彼らの関係構築にどのような役割を果たしているかについて検討したところ、1 期では、興味や関心を共有しうる関係の確認、2 期ではそうした関係の拡張、3 期では、自他の関係調整、4 期では、経験の再構築、5 期では、時間的拡張性をもった関係構築等がなされており、時期を通じて有意義な役割を果たしていることがうかがわれた。
こうした共通する発達的変化の要因として、心の理論(Perner,1991)や、それと深く関わる(木下,2008) 時間的拡張自己(Neisser,1988)の形成が進み、3 期（4 歳 10～3 月）以降の同言及の機能が、自他感情の違いや時間的視点をふまえ感情的側面から自他の心を捉えることとつながり得るものとなってきたことが影響した可能性がうかがえた。これらは幼児期の親密な仲間関係での同感情言及の対人機能に関わる発達プロセスを示唆する結果として大きな意義があるものといえる。加えて、これまで、感情理解の個人差と「心の理論」の個人差が 4、5 歳期に関連してくるという指摘もある中で（森野,2005)、そうしたプロセスを通じた、感情的側面からの心への気づきや理解の蓄積が、「心の理論」の発達に寄与し、その個人差に関わる一因となりうる可能性が窺われる結果としても重要といえる。
一方、同言及の機能にはグループ内グループ内の情緒的関係性が反映した固有性もみられた。例えば、「遊戯性」を伴う言及機能の【遊戯的誇示】はリーダー主導で遊ぶ傾向がみられた A グループに、【遊戯的共有】は目立ったリーダー役がおらず、友好的な雰囲気で遊ぶ傾向がみられた B グループにそれぞれ限定されており、その結果共有される了解事項や、関係構築に関わる感情経験の内容が異なってくる可能性が示唆された。
総じて、幼児期の親密な仲間間の遊びを通じた関わりでの、「おもしろい」、「楽しい」に関わる感情言及の機能が発達的に変化する中で、時期を通じてその関係構築に大きな役割を果たしている可能性を示唆する結果が得られたことは、本研究課題の発展につながる重要な成果と考えられる。なお、本成果については、「発達心理学研究」誌において論文報告を行った（「幼児期の親密な仲間間の「おもしろい」・「楽しい」の感情言及機能：その関係構築に果たす役割に着目した発達的検討」,岩田,2019a)。

②幼児期のネガティブ感情言及と関係調整プロセスについての検討
幼児期のネガティブ感情言及と関係調整プロセスのありようについては、幼児の仲間遊びでの（特に意図せず生じた）葛藤状況に着目し、そこでどのような感情言及を含むやりとりがなされているかについて基礎的な分析を進めた。その結果、4 歳児クラスの幼児間の葛藤状況の解決において、仲間の直接的、間接的関与が重要な役割を担ってくることや、当事者間の話題の転換や軽口が葛藤解決のきっかけとなっていくことがうかがえた（岩田,教心総会,2018)。
こうした結果をふまえ、3～4 歳児クラスの幼児がいつどのように遊戯的にネガティブ感情語に言及するかに着目し、さらに検討を行った。その結果、3 歳児クラスから 4 歳児クラスにかけて仲間や保育者の働きかけに対する仲間間の遊戯的な反応が一定してみられることが示された。また、3 歳児クラスでは、仲間や保育者の行動を遊戯的に禁止・阻止するような状況や、4 歳児クラスでは、経験について、遊戯的に述べるような言及等もみられるなど、言及のありようが多様になっていく可能性も示された（岩田,発心大会,2019；教心総会,2019)。今後、これらの基礎的な分析結果をもとに、より詳細な検討を行っていく予定である。

(2)幼児期の感情言及がなされる仲間遊び文脈の検討
幼児の感情言及と関係調整プロセスを今後さらに詳細に捉えていく上では、幼児期の仲間遊びを通じてみられる感情言及がどのような仲間遊び文脈でみられるかについてその様相を把握する必要がある。こうした観点から、幼稚園期の 1 年間の各年齢クラス（3、4、5 歳児クラス）の横断的データをふまえて検討した。検討の結果、3 歳クラス児では仲間遊びのすべての文脈でまんべんなく感情言及がみられたが、4 歳クラス児では、〈ふりの設定・提案〉文脈での感情言及が多くみられ、5 歳児クラス児では、〈遊び（ふり以外）の設定・提案〉での感情言及が多くみられるという結果が得られた。加えて、ポジティブ・ネガティブ感情言及がなされやすい仲間遊び文脈についても分析を行った。その結果、特に 4 歳児クラスの〈ふりの設定・提案〉文脈で、ポジ・ネガ感情も含めた感情に関わる言及がよりなされている結果が得られ、同文脈が、4 歳クラス期において、ポジティブ・ネガティブ感情言及を通じた仲間遊びでの感情コミュニケーションが、より深まっていく文脈であることが示唆された。
これらの結果は、幼児たちの感情言及がなされやすい仲間遊びの文脈が年齢段階によって変化することや、幼稚園期を通じた多様な仲間遊び文脈において、幼児の感情言及を含む感情コンピテンスを促すやりとりがなされている可能性を示唆しており、意義のある結果といえる。今後は、それらの文脈でどのような関係調整が行われているかも含め今後検討を行っていく必要がある。なお、本成果については、「乳幼児教育学研究」誌において論文報告を行った(「園

での仲間遊びにおける幼児の感情言及文脈についての発達的検討」,岩田,2019b)。

(3)児童期の話し合い場面での関係調整的コミュニケーションの成立過程に関わる基礎的検討

本研究期間では､低･高学年学級の児童間の話し合い場面について継続的にデータを収集し、プロトコル化も含めた基礎データの整備を行いながら、基礎分析を進めた。

①高学年児童の学級活動での初期の話し合い進行における教師の介入

高学年児童の自主的な話し合いが開始されたばかりの初期のやりとりでは、その進行そのものにおいて、様々な難しさが生じており、そもそもの成立に向け、教師の多様な介入がなされていること、また、こうした児童主導の話し合いの成立過程は、児童の感情的側面を含む関係調整的コミュニケーションが展開していく過程とも切り離せないものであることが推察された。そうした観点から、児童主導による話し合い活動が開始されたばかり(5 月)の 6 年生児童の学級活動での話し合いにおいて、進行上、どのような難しさが生じ、それに対してどのような教師の介入がなされるかについて検討した（岩田・佐藤,教心総会,2017)。

その結果、話し合い初期（5 月）においては、教師の介入が、〈議長団〉、〈学級全体〉、〈発言者〉に対してなされる中で、半数以上の発話が学級全体に対して向けられていること、議長団に対しては、〈話し合いの進行に関わる助言・促し〉（45.5%)、学級全体に対しては、〈話し合いの進行について考えさせる〉(41.9%）といった介入が最も多く、発言者に対しては、〈発言内容や言い方への助言・促し〉、〈精緻化を求める〉といった介入（各 50%）多くみられた。一方で、話し合いが進行していく上で生じる難しさとして、何を話し合うかが明確ではないまま話し合いが進行していく状況が一つに挙げられた。やりとりの検討からは、教師がそうした状況に対して学級全体に対して話し合いのポイントを示しながら、話し合いの進行に対する助言や進行について考えさせる問いかけをし、その中で議長団にも伝えるという形での介入を行うことがみられており、その後の介入の変化もふまえた検討の必要性が示された。

②高学年児童の話し合い開始期と中盤期における教師の介入の変化

①の検討もふまえ、高学年児童の話し合い開始期（5 月～6 月）と、話し合いに一定程度慣れてきた中盤期（9 月～10 月）において、児童の話し合いに関わるスキルや感情的（心理的）側面への気づきを支え得る教師の介入やフィードバックの内容が両時期にどのように変化するかについて基礎分析を行った（岩田・佐藤,日心大会,2019)。

その結果、話し合い開始期では【話し合いルール】についての介入(23.8%)の他、【議題の種類】や【議題の選定】、【話し合いの流れ】、【話し合いの論点】等、【決定方法（技術)】を除くすべての介入がみられ、フィードバックについても、【話し合いの流れ】と【決定方法】が順に44.4%、33,3%を占めた（Table1)。こうしたことからは、同時期の児童たちが話し合いそのものの進行に関わる多くの課題を抱えながら話し合いの運営を行っていたこと、また、教師もそれに着目し、それを支える試みを行っていたことが推察された。一方、フィードバックのうち、肯定的評価を伴うものについては、【話し合いの流れ】や【決定方法】に関するものがみられ、同時期の児童たちが、それらのスキルを中心に、自主的な話し合いの運営のスキルを身に着け始めていること、それが教師によって評価もされていることが推察された。

中盤期（9 月～10 月）では、【話し合いの流れ】に関する介入が半数以上を占め（53.0%)、フィードバックについては、【話し合いの論点】が最も多くを占めた（33.3%)。その背景としては、学級や個人のうち、誰の問題として考えるかといった帰属の捉え方が難しい議題もみられるようになったことが影響した可能性が考えられた。また、フィードバックのうち、肯定的評価を伴うものについては、開始期と同様に【話し合いの流れ】と【決定方法】に関するものがみられ、児童がそれらを話し合いの基本的なスキルとして受け止め実践しており、教師がそうした状況を肯定的に評価している様子がみられた。

一方､2 時期を通じ､【感情的側面】に関わる教師の介入及びフィードバックが一定程度（5.9%～25.0%）を占めた。学級やその構成員のさまざまな感情的側面を考慮した話し合いの展開や終結には、一定の困難さもみられ、そうした中で、教師がフィードバックを用いて、そうした側面への児童の気付きを促す試みがなされていることが推察された。

Table1. 開始期と中盤期における児童の話し合いへの教師の介入の内容

	開始期(5月～6月)						中盤期(9月～10月)					
	介入		フィードバック		フィードバックのうち肯定的評価		介入		フィードバック		フィードバックのうち肯定的評価	
議題の種類	3	14.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	8.3	0	0.0
議題の選定	3	14.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
話し合いの流れ	4	19.0	4	44.4	2	66.7	9	53.0	3	25.0	3	75.0
話し合いルール	5	23.8	1	11.1	0	0.0	3	17.6	0	0.0	0	0.0
話し合いの論点	2	9.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	33.3	0	0.0
決定方法	1	4.8	3	33.3	1	33.3	2	9.5	1	8.3	1	25.0
決定方法(技術)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	9.5	0	0.0	0	0.0
感情的側面	3	14.3	1	11.1	0	0.0	1	5.9	3	25.0	0	0.0
Total	21	100.0	9	100.0	3	100.0	17	100.0	12	100.0	4	100.0

注. 複数の内容に該当する場合はそれぞれに分類した.

(4)得られた成果の国内外における位置づけ・インパクト

これまで、幼児期以降の親密な仲間関係にみられる感情言及のありようはもとより、その関

係構築に果たす役割に焦点を当てた検討は、国内外において、極めて少ない現状があった。こうした背景の中で、本研究期間に行った、幼児期の感情言及（特にポジティブ感情言及）と関係調整プロセスについての研究成果は、幼児の社会的場面での感情言及の様相やそれらがもつ対人機能を明らかにするものであり、感情言及を含む感情コンピテンスの発達に重要な示唆を与える結果と考えられる。同時に、同成果は、これまで、普遍的な理解や認知的側面に重点がおかれ、実験的検討が中心となってきた、心の理論研究に対して、親密な関係性の中での感情的側面を通じた心的理解の観点から、その発達の個人差に関わる資料も提供しうる点で重要である。

また、幼児期の感情言及がなされる仲間遊び文脈についての研究成果は、幼児期(幼稚園期)を通じた仲間遊びでの感情言及文脈の発達的変化に関わる詳細な基礎資料を提供しうるものである。これらの、幼児の仲間間での感情言及プロセスに関わる一連の研究成果は、発達心理学領域のみならず、幼稚園生活を通じ、仲間同士で喜び等の感情を共有し合い，肯定的な関係構築を行うことを大きなねらいとする幼児教育（文部科学省，2017）の領域にも関わる基礎資料を提供しうるものとして、その意義は大きいと考えられる。

さらに､児童期の話し合い場面での関係調整的コミュニケーションに関わる基礎的検討では、それが児童主導の話し合いの成立過程と深く関わるという観点から、話し合い成立期の教師の介入内容に着目した。児童主導の話し合いが成立していくことに伴っていつどのような感情的側面を含む関係調整的コミュニケーションが構築されていくかは、今後引き続き検討を行っていくが、本研究で見出された視点や基礎分析の成果は、これまでに検討がほとんどなされていない、児童期の社会的関係の中での感情言及と関係調整の実態を今後明らかにしていく上で重要と考えられる。

(5) 今後の展望

今後の重要な検討課題として、第一に、幼児期のポジティブ感情言及と関係調整プロセスについて、多様な仲間関係（関係性の違いや、性差、等）において、そこでの感情言及が彼らの関係調整にどのような役割を果たしているかについて、さらに詳細に検討を行っていくことが挙げられる。また、ネガティブ感情言及がもつ関係調整プロセスについても、現在まで進んでいる、ネガティブ感情語の遊戯的な使用等に関わる質的分析をさらに進めていくことが挙げられる。今後は、それらの成果をまとめ、発信していくことが研究の重要な焦点となる。さらに、幼稚園期の学年の進行に伴う、多様な遊びやその展開、また、その中でみられる仲間同士の具体的なやりとり等を視野に入れながら、仲間遊びでの感情コミュニケーションについてより詳細な検討を行うことも今後の課題である。

第二の課題として、学校場面の児童間の感情・関係調整的コミュニケーションについて、今回進めてきた基礎分析結果をもとに、児童同士の自主的な話し合いの成立過程もふまえながら検討を進めていくことが挙げられる。特に児童同士の話し合いの進行に一定程度慣れた中盤期以降の話し合いでは、感情コンピテンスとも関わる児童間の多様なやりとりがみられてくることが推察される。それらに関する分析を行うことが直近の課題である。それらもふまえ、児童間の児童期での感情言及を含めた関係調整の発達プロセスをさらに深く捉えていくことが必要である。

さらに、幼児や児童を含む家族間（三世代）にみられる感情・関係調整的コミュニケーションについては、本研究期間においては、データの整備と予備分析が中心となった。現在まで、そのありようや変化過程を捉える事例分析を中心とした基礎的検討が進んでいるところである。第三の課題としては、同結果をふまえ、本分析の結果について順次報告していくことが今後必要である。これらにより、さまざまな社会的関係における感情言及と関係調整の発達について明らかにしていくことが望まれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岩田美保	４．巻 28
２．論文標題 園での仲間遊びにおける幼児の感情言及文脈についての発達的検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 乳幼児教育学研究	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩田美保	４．巻 30
２．論文標題 幼児期の親密な仲間間の「おもしろい」・「楽しい」の感情言及機能：その関係構築に果たす役割に着目した発達的検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 発達心理学研究	６．最初と最後の頁 44-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岩田美保	４．巻 67
２．論文標題 小学生期における家族との夕食時の会話：夕食時の家族メンバーの様態と話題に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 157-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 広瀬由紀・岩田美保	４．巻 67
２．論文標題 特別な配慮を要する子を含めた葛藤解決方略に関する検討－保育記録の分析を通して－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 167-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 広瀬由紀・岩田美保	4．巻 66
2．論文標題 特別な配慮を要する子を含めた子どもどうしの関係性の変容過程とその要因―保育者への聞き取り記録からの検討―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 105-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 岩田美保（企画・司会： 中道圭人、岩田美保、企画・ファシリテー タ： 砂上史子、ファシリテータ： 平林秀美、話題提供： 中道直子、髙橋実里、野澤祥子）
2．発表標題 乳幼児期の社会情動的能力の発達と保育・家庭環境（自主シンポジウム）
3．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 岩田美保
2．発表標題 園の仲間遊びにおける感情言及－4歳クラス期の男児間・女児間の感情言及文脈の違い－
3．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 岩田美保
2．発表標題 園の仲間遊びにおける感情語の使用：4歳クラス児はいつどのように遊戯的にネガティブ感情語に言及するか
3．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4．発表年 2019年

１．発表者名 翁川千里・岩田美保
２．発表標題 複雑な感情を引き起こす場面の検討
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田美保・佐藤　翔
２．発表標題 児童間の話し合いにおける教師の助言的介入：話し合いのスキルと感情的側面への気付きを促す介入の2時期の変化に着目して
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Miho Iwata
２．発表標題 Young children’s pragmatic context of emotional utterances: Focusing on gender differences
３．学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 広瀬由紀・岩田美保
２．発表標題 インクルーシブな保育における子ども同士の関わり（２）
３．学会等名 日本保育学会第72回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田美保
２．発表標題 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討８
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 広瀬由紀・岩田美保
２．発表標題 インクルーシブな保育における子ども同士の関わり
３．学会等名 日本保育学会第71回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩田美保
２．発表標題 園での仲間遊びにおける葛藤調整－〈意図的ではないとみられる行動〉から生じた4歳クラス児の葛藤状況に着目して－
３．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岩田美保
２．発表標題 園の仲間遊びにおける感情語の使用－幼児はいつどのように遊戯的にネガティブ感情語に言及するか－
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 広瀬由紀・岩田美保
２．発表標題 インクルーシブな保育における子ども間の葛藤場面における解決方略２－思いや考えが伝わらない子を含めた葛藤に5歳児はどのように向き合うのか－
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩田美保
２．発表標題 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討7
３．学会等名 日本保育学会第70回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩田美保（企画代表者：中野茂、話題提供者：中野茂、島田将喜、田暁潔、砂上史子、指定討論者：岩田美保、司会者：橋本久美）
２．発表標題 「遊びとは？」－改めて問い直すー（公募シンポジウム）
３．学会等名 日本心理学会日本心理学会第81回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩田美保・佐藤　翔
２．発表標題 高学年学級での初期の話し合い進行における教師の介入
３．学会等名 日本教育心理学会第59回総会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岩田美保
２．発表標題 園での仲間遊びにおける葛藤調整―〈意図的ではないとみられる行動〉が原因で生じた葛藤状況に着目して―
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 広瀬由紀・岩田美保
２．発表標題 インクルーシブな保育における子ども間の葛藤場面における解決方略－保育者の保育記録を手がかりとした検討―
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小山義徳編著　岩田美保・大芦治・樽木靖夫・野中舞子・伏見陽児・真鍋健共著（筆者分担箇所：第９章「発達の特徴を理解する」，163-189）	４．発行年 2018年
２．出版社 サイエンス社	５．総ページ数 257
３．書名 基礎から学ぶ教育心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考